

「いわき市に避難している浪江町民の健康調査支援事業」では、避難住民の健康調査を行う「健康見守り調査活動」があります。この活動にあたってきた日赤なみえ保健室のスタッフの皆さんに、これまでの活動についてお話を伺いました。

場所： 日赤なみえ保健室(福島県いわき市)

開催日： 2017年3月14日

- 今では町民にも理解されているが、最初は町民に知られていない状態で、何もないところから手探りでスタートだったので大変だった。大学の先生方が基礎を作って、今はとてもスムーズに活動できている。
- 被災されても前向きに生きている方々からは、私自身がこれから生きていく上で糧となるような宝石みたいな言葉をいっぱい聞かせて頂いた。
- 5～6年経過して、家も建ててここを終の棲家と決めて落ち着いて見える人、家族全員健康で支援は必要ないという人もいるが、本当に癒されているかは別。いつまで経っても浪江にいたころのように心が晴れているわけではない。
- 家族のありかた、周りの住民との関係などの問題があり、避難してきたことを知られずひっそり暮らしたい人も多い。問題は根深い。
- 日赤が撤退した後も活動が継続されるようすることが重要であり、町の保健師と一緒に(現在、月1回の会議で情報交換しているような活動を)継続していくことが必要だと思う。
- 時がたってみると5年近く活動している。(事業は単年度契約であるが、)被災者の方を継続的に見ていくためには長期計画が重要であり、責任者も同一の人の方が良いと思う。可能であれば、責任者となる人を5年間くらいの長期契約で配置するとか。このような甚大な災害では、良い運営をするために、長期的な支援をするような事業計画が必要である。